

〔和爾雅^七〕石耳^{一名石菌}

〔本朝食鑑^三〕石茸^{訓伊和多計}

集解卽石耳也、柔薄如織、外滑而青白色、內粗而黑色、其黑色處附石有微香、而味淡微甘、常生于峯頭巖石之上、山人采之、先造竹籃方二三尺者、著數十丈之麻繩、藤繩、而後躡巖攀蒙茸、到巖石處、以繩端繫縛于巖邊、菜茸充于籃中、自乘其籃、牽繩下千仞之麓、若傍觀之、則眼眩魂銷、不可熟視、然采之山人每馴不屑、亦竟無失命者可謂奇、嗚呼危哉、甲信飛常奧及紀勢海西諸山最多、晒乾以貨于四方、其生者亦味佳也、

氣味、甘平無毒、或曰冷、主治、明目益精收血、

〔和漢三才圖會^{百一}〕石耳 靈芝 伊波太介^{略中}

按石耳狀如木耳、無繖柄、外滑而灰白色、裏粗而黑色、其黑處附石生、日乾者卷翻於外、宛似八幡黑草、用時以灰宜洗、外滑和臛食甘美、此物在峯頭巖石上難甚得、山人每馴不屑而取之、處處高山皆有、

〔重修本草綱目啓蒙^{二十}〕石耳 一ハタケ 一名石芝^{函史}

山中巖石上ニ生ズ、形圓ニシテ薄ク皮ノ如シ、大サ二三寸、背ノ正中ニ短莖アリテ石ニ附ク、層層相連リ生ジ、石花^{トカクケ}ノ如シ、採リ乾シテ賣ル、水ニ浸シ煮食バ味淡脆、面ハ黑色背ハ青白色ナリ、唐土ノ石耳清齋齋來スル者アリ、和産ニ異ナラズ、

〔雲萍雜志^二〕木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を取るには、籬といふものを造りて、綱をつけて、夫はそれに入りて、その妻樹々の枝より下げて、つりおろし、引き上げなどして、谷間の岩茸を取りぬるとぞ、下は幾丈とも限り知れざるところなるよし、見し人ものがたれり、もしあやまちて綱のきれて、落ちたらんには命なかるべし、

〔三省錄^四〕水藩の檜山氏が、慶安五辰年四月十五日を同廿二日まで、^{略註}水府の御宮別當なる東